

**「日中植林・植樹国際連帯事業」日中大学生五百人交流団
参加者の感想（抜粋）**

寧夏回族自治区（島根県）分団

○今回の交流活動プログラムを通じて日本への理解が深まった。埋め立て、ゴミの分類、リサイクル資源の有効利用、日本人が時間を守り礼儀正しいことなど、印象に残った。

私の故郷も森林セラピーによい場所がたくさんある。大自然は私たちに多くの恩恵をもたらすが、あまり有効利用できていない。日本の森林セラピーで印象に残ったのは、参加者が歩く道に木くずが厚く敷かれ、膝への負担を緩和していたこと。帰国後、関連部門に改善案として提出したい。

日本人の環境保護に対する意識に驚いた。ゴミは丸一日分でも持ち帰る。帰国後、周りの人達に日本の情報を紹介したい。皆、関心を持ってくれると思う。

忙しかった行程も間もなく終わろうとしている。この数日間で日本が好きになった。頑張って大学院に合格し、また日本へ来たい。

○環境に関するセミナーで「木はしっかりと保護すれば限りなく寿命を伸ばせる」ということを知り、森の環境を守ることの重要性が理解できた。その後の森林セラピーや活動の中で見た木はどれもしっかりと保護され、丈夫に生い茂っていて、木を守ろうとする日本人の気持ちを感じた。島根大学で日本の大学生と交流した時にも、大学生生活の様々な場面で森林を守る活動をしていると聞いた。環境保護知識の普及について私たちは普段あまり意識していないので、帰国後は、森林や環境に関心を持つようにし、周りの人にも伝えたい。

北区防災センターを見学して地震の体験をした時はとても動揺した。本物の地震を体験したことはあるが、さほど真剣に考えたことはなかった。今回、地震の資料や死傷者数を見てとても恐ろしく感じた。地震の被害はとても痛ましいものだ。帰宅したら真剣に防災知識を学び、周りの人にもその重要性を伝えたい。

○さようならは言いたくない。この数日間は夢のようだった。心地よい人々や環境に接し、優秀な先輩たちが上手に日本語を話す場面も見られた。これからの約3年間、日本語を一生懸命学び、微力ではあるが、言葉を通じて中日両国の将来のために貢献したい。

日本で最も印象に残ったのは、礼儀正しさと環境保護。この2点において日本はとてもすばらしく、中国との差は非常に大きい。礼儀正しさは一個人の素養だけでなく、一国の風格も表している。買い物の支払いで互いに感謝の言葉を述べる。知り合いでなくても挨拶をする。お辞儀をして相手を尊重する。膝をついて料理を配膳する。これらすべてが私にとっては初めての経験で、とても好ましく思った。環境保護については言うまでもない。街がきれいなので、ポイ捨てすら犯罪のように感じられ、自覚的に自分のものは持ち帰ることになる。

「人に迷惑をかけない」。これは先生から教わった日本人が行動する時の考え方である。この言葉の精髓を中国人に伝えて共有し、「窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を濟（すく）ふ」という教えを実行したい。今回の訪問活動のために尽力し、再び日本を訪問したいと思わせてくれたスタッフの皆に感謝している。

○今回の訪日交流を通じて、東京の繁栄ぶりや島根の美しさと心地よさを体感できた。わずか6日間の滞在だったが、本場の日本料理、温泉、そして簡単な日本語で通りがかりの人に挨拶したこと。これらすべてが記憶に残るすばらしい思い出となった。日本での滞在中、中日両国の文化が融合している所をたくさん見ることができ、親しみを感じた。日本人はとてもフレンドリーで、日本のスタッフの気配りも行き届いており、両国の友好を感じることができた。この友情を中国へ持ち帰り、日本の文化を周りの人達に紹介し、日本で楽しく過ごしたことを伝えたい。

明日、東京を離れるのは辛いですが、日本で友達ができ、E-mailのアドレスもあるので、今後も連絡を取り合える。次は、日本の友達を中国で迎え、一緒にパンダや北京の長城、故宮を見に行き、本場の中国料理を食べてもらいたい。この友情がいつまでも続くことを願っている。

最後に、今回の活動で出会ったすべての人に御礼を言いたい。特に、今回の主催者やスタッフのおかげで大切な思い出ができたことにとっても感謝している。

湖北省（長崎県）分団

○今回の活動に参加し、日本に対する印象がすっかり変わった。訪日前の認識は、日本は四方を海に囲まれ、災害が頻発する国だということだけで、日本の全体像などで特に印象深いものはなかった。だが、今回の訪日で、日本という国や日本人についてすばらしい点をたくさん発見することができた。

ホームステイでは、日本人がフレンドリーで親切だということを感じた。日本の家庭に入ってその雰囲気を感じ、和食を食べ、和室に泊まり、和服を着るなど、大和文化の魅力を知った。特に印象深かったのは、ホームステイ先のおばあさんが髪を結ってくれた時、自分の祖母にとってもよく似ていたこと。祖母が亡くなってから、長い間こんな経験はしていなかったので、おばあさんに優しくしてもらって感動した。言葉や文化は異なるが、同じ黄色人種なので、とても親しみを感じた。

次に印象に残ったのは、雲仙岳災害記念館の視察。館内のシアターや劇場では当時の情景をわかりやすく再現していて、とても心打たれた。その後の土石流被災家屋の視察では、大変な被害を受けた家屋を目の当たりにし、ボランティアのおじいさんのすばらしい解説を聞き、自ずと大自然に対する畏敬の念を感じ、自然災害の前で人類がいかに小さく無力な存在であるかを知った。自然災害に関する防災知識もとても役に立つものだった。

全体として、今回の活動では多くの感動と驚きがあった。また日本を訪問したい。

○今回の交流活動に参加できてとてもよかった。多くの貴重な経験ができた。長崎の植樹活動では、園児も植樹に参加しており、日本が自然環境教育を重視していることを感じた。中国ではこの点はまだ十分できていない。環境防災施設の視察では、自然の大きな破壊力を感じると共に、日本が常に自然災害関連の防災教育を重視していることがわかった。ホームステイ体験では、日本の家庭に入り、日本人と積極的に交流できた。温かい家庭の雰囲気ですばらしかったので、自分も携帯電話を置き、自分の家族と交流しようと思った。また、日本の農村はインフラ建設がとても進んでいて、道路も整備されて清潔。中国の農村とは大きな違いがあった。中国の農村建設は日本を手本とすべき。そうすれば、農家の人達も幸せな生活ができるようになる。今回の活動で最も感動したのは、中日両国の大学生の交流活動。夕食交流会では、多くの日本の友達と交流することができ、短い時間だったが友情を育むことができた。中日両国の大学生が今後の両国関係に明るい希望を抱いていることが感じられた。私たち若者や学生は国家建設の主力なので、今後、今回のような交流の機会が更に増えれば、中日両国のわだかまりも早く解決し、両国関係は更に発展すると思う。帰国後は、友達に自分が実際に見た日本を紹介する。両国関係を発展させ、両国人民の間の誤解を解くために、自分も貢献したい。

○農村の環境改善や花のまちづくりという面で、日本の経験や実現のための努力は参考にすべきだと感じた。日本は大都市も農村もトイレが快適で清潔だが、中国では、大都市の状況はよいものの、農村のトイレは改善が必要だ。また、日本の水再生システムは非常に整備されていて、環境を守ると同時に経済効果も得られている。特に行政機関の努力は参考にすべきだ。

帰国後は、WeChat やウェイボーなどの SNS を通じて、自分が見聞きしたことをそのまま伝え、周りの人達に自分の体験を語りたい。皆に先入観や偏見を捨て、人の言うことを鵜呑みにせず、自分の目や耳で見聞きするように勧めたい。そうすれば、友好的で調和の取れた、心の通い合う中日交流の環境を作ることができる。

○参考にすべき点、異なる点：①環境保護の意識はとても重要。地球は一つしかないの、生存環境を守ることができなければ、快適で健康的な生活は望めず、報いを受けるのは私達人類。②防災意識はおろそかになりがちだが、土石流被災家屋保存公園の視察では、実物や記録映像だけでなく、寸劇、災害発生時の様子を再現した映像などがあり、印象に残った。また、20年以上の間きちんと保存されている被災家屋を見て、とても驚いた。私が覚えている限りでは、中国にはこのような公園はない。災害があまり多くないため防災意識が低いので、この分野の教育は十分ではない。日本を参考にすべきだ。③生活のあらゆる場面で水は必要。きれいな水は私たちの健康と密接な関係がある。1

杯の水を汚すのに数秒しかかからないが、汚水を浄化するためには多くの工程を経なければならず、多くの時間と労力が要る。皆が節水を心がける必要がある。④中国の大学の授業は重苦しく、一般教養科目では、学生が先生の講義を聴いていないことも多い。日本のゼミは、テーマは難しいが、資料を調べ、学生同士が話し合いをする機会があり、まとめや発表する能力も培われる。一つの授業から多くの知識を学ぶことができ、非常に参考になった。

伝えたい情報:サービス業については、とてもサービスが行き届いていた。国民の資質面では、たまに良くないこともあったが、全体として秩序を重視しており、外国人をよく受け入れている。環境保護や防災面の意識の高さについては、国土が狭くて資源が少なく、自然災害が多いため、日本人は環境保護や防災を非常に重視している。その努力は学ぶべきだ。家屋の清掃や環境の快適さについては、田舎の方でも汚いことはなく、都市も非常に清潔だった。また、受け入れスタッフも一生懸命やってくれた。今回の交流の機会を与えてくれたことに感謝している。帰国後は、今回の体験を整理している。帰国後は、今回の体験を整理して伝えたい。